

【中学生の部：会長賞②】

## 「伝えたいこと」

鹿児島県・日置市立伊集院北中学校

1年 梶原 つばさ さん

「あーまたとられた。」

自分の赤ペンのキャップがとられている。とったのは兄だ。兄は赤色のものが好きで、よく赤ペンや調味料のふたをとってしまう。気付いたときには、もう赤ペンのペン先が乾いてしまい、使い物にならない状態になってしまった。兄は、そうやってとった赤いものをマイバッグに入れて肌身離さず持ち歩いている。「何やってんだろ。」と思うけれど、本人はうれしいのだろうと思う。

四歳年上の兄は、重度の自閉症で、養護学校の高等部に通っている。自閉症とは、脳の機能障害によるもので、脳の成熟の遅れが原因と考えられている。兄は一歳半健診のときに、自閉症と診断された。

そんな兄がいることで、大変な思いもたくさんしてきた。家を脱走して、家族総出で探し回ったこともある。自分が一生懸命に取り組んだ宿題を破かれたり、落書きされたりして、とても悲しい思いをしたこともある。家族で外出すると、周りから冷たい目線で見られることもあった。兄は、場所に関係なく、大声で叫んでしまう。周りの人は、見慣れていないからなのか、じろじろと眺めてくる。それが、兄にとっても家族にとっても悔しいことだった。

兄のことで、とても強く残っている記憶がある。自分が物心ついたころの記憶で、母が体調を崩したときのことだ。体調を崩したのは夕方頃で、夕飯のための料理は一品しか作られていなかった。父は仕事から帰ってきておらず、二人で父の帰りを待つだけだった。そのとき兄がふと立ち上がったかと思うと、その一品しかない料理に箸を添えて運んできてくれたのだ。ほかの人が同じことをしても、「ありがとう」と言って普通に感謝をするくらいだが、兄がすると、その純粹きわまりない行動がストレートに心の中に飛び込んでくる。思い返すと今でも泣きそうになる。当時の記憶はあいまいなものが多いのだが、そのときの記憶は鮮明に残っている。

幼いころから兄が近くにいるのが当たり前で、障害のことを気にしたことはなかった。でも、ある気持ちはずっと抱いてきた。それは兄と話したいということだ。兄は十六歳になった今でさえ、うまく話すことができない。何か言うとき、だいたい単語だけで意思を伝える。他の人のお兄さんと違って、会話をすることができない。会話が成り立てば、気持ちが伝わるのだが、話せないと

なると、とてももどかしい思いでいっぱいになる。

兄の気持ちを理解したいという一心で、僕は、小学校の高学年から、兄の通っている学童にボランティアで参加している。小学生から高校生まで十四人ほどの児童生徒がいる。兄とは違う障害を持っていたり、似た障害を持っていたりする。ボランティアでは、料理を作ったり、外に出て遊んだりして過ごす。

一緒に過ごしてみて思うのは、楽しんでいる姿は僕たちとあまり変わらないということだ。そうやって一緒に楽しんでいるうちに、多くの子とコミュニケーションがとれるようになった。話すときには、相手と同じ目線にたって話すこと、相手のことを考えて、状況に応じた口調や言葉を選んで話すことが重要だということを学んだ。兄の気持ちを理解するのに少しは役立っていると思う。

いつか兄と話せる日が来たら伝えたいことがある。それは、「障害があっても決して不幸じゃないよ。」ということ。そして、「僕もお兄ちゃんのことかわいそうでもないし、不幸でもないよ。」ということ。いつかこのことが伝えられる日がくるそのときまで、兄をサポートしていきたいと思う。